

第1回 「いじめ、自殺予防のために学校がやらなければならないこと

～これからの教育課題も含めて～

講師：武蔵野大学教授 堀米 孝尚 先生

1 いじめ

(1) 中野富士見中学校「葬式ごっこ」

メディアにおいて、最初に取り上げられた「いじめ」は、中野富士見中学校(web参照)での「葬式ごっこ」である。平成になってからは「綾瀬のコンクリート詰め殺害事件」や「山形マット殺人」などがあり、いじめによる自殺はメディアでかなり取り上げられている。資料を見返すと、中2での事件や事故が少なくない。学校でどのような対応をしたのかが問われてくる。

(2) 学校いじめ防止基本方針

『いじめ防止対策推進法』というものができた。これは大津の事件後にできたものである。これを受け、各校では『学校いじめ防止基本方針』というものを作成しているはずである。国が作成しているもの、東京都が作成しているもの、各校で作成しているものを全て比較してみるとよい。本当にこれでよいのかを振り返ることにつながる。

(3) 『いじめ防止対策推進法』が求めていること

①積極的ないじめの認知 ②組織としての対応 ③学校いじめ防止基本方針

④重大事態（自殺）の場合→ 重大事態が起きないように早期発見・早期対応が大切であり、策定した『学校いじめ防止基本方針』は必ず履行していくこと。

(4) 人材育成

(5) DVD『STOP! いじめ（小学校編）』鑑賞

(6) 学校のいじめ防止のポイント

「いつでも、どこでも、誰にでも起こりうる」ということを念頭に「いじめは絶対に許さない!」という指導を行い、その姿勢を貫くことが大切である。実際にいじめがあった場合には、しっかりと指導を行わなくてはならない。ただし、いじめを受けている子は自分から「いじめられている」ということは、決して言わない。周りの児童生徒から話を聞き、個別で安心して話せる場を設定し指導にあたる必要がある。また、望ましい学級づくりをしていくことも大切。子どもが安心して居られる、最低限の保障を学級や学校はすべきである。間違いを認め合える集団、そこから自己肯定感や自尊感情を育む集団にしていくとよい。学級ではグループがいくつか出来るが、グループからチームにしていくことも大事なことである。一人ひとりに、チームの一員であることを意識させていくとともに、チームにはルール(きまり・規則)があるものだという事を教えていかなければならない。

(7) これからの教育課題への対応

①道徳の教科化→ 道徳が教科化になったのは、道徳の内容が全うされておらず、教科化にせざるを得なかった。やらざるを得ない状況になっているということを忘れてはいけない。活動的なものも体験的なものも、幅広く認めていこうというのが今回の教科化の目的である。

②特別支援教育→ いじめの対象には、特別支援対象の子がなりやすい。現在、特別支援教育はまだ根付いていないとは言えない。学級にいる発達障害の子ども達を周りの子ども達が支えることができているか、共生社会が作りあげられているのか。特別支援教育の視点というのはインクルーシブ教育を意識することにもつながる。

道徳と特別支援教育の視点は、いじめを防止する一番近い観点ではないかと思っている。これからの教育課題は全て、いじめ防止につながっていく。

2 まとめ

文科省が出した『いじめ防止対策推進法』の概要と全文は、しっかり手元に持っていてほしい。

区市町村の教育委員会が推進しているものを基に、自分の学校の方針として本当にもれなくやっているのか？そして学校の特徴として、こういうものを入れようかなど協議を重ねていくことで『学校いじめ防止基本方針』がもっと生きたものになってくる。作成しただけで終わりではなく、その方針に魂を入れることが、いじめを防止する最大限の力になるし、教員の育成にもつながる。

第2回 ①「大人の発達障害について」

講師：明星大学教育学部 講師 中田 正敏 先生

I 大人の発達障害という媒介と同僚・保護者との協働

～インクルーシブな学校づくりの視点から～

インクルーシブな学校づくりの鉄則として、個々の違いを多様性として認め、組織の一員として学校の中にどう組み込んでいくかが大切である。それぞれの障害について、タイプ別の対応策立案は困難であり、その場に応じた対応が必要となる。つまり、システム化することでスムーズに経営を進めることができる。

大人の発達障害を理解し組織の中でどのように組み込んでいくかは、発達障害をもった生徒への対応にもつながっていく。

1 「特別な教育的ニーズにおける原則、政策、実践に関するサラマンカ宣言」に付帯する「特別なニーズに関する行動のための枠組み」サラマンカ宣言では、いつでも誰かが特別な教育的ニーズをもち、支援を必要とし、人的・物的に整備されたインクルーシブな学校が必要であるとしている。また、特別なニーズをもつ子どもたちにより敏感に対応できる学校組織を創るためには、柔軟な管理・運営（マネジメント）の手法を開発する必要がある。障害だけでなく貧困を含めた様々な子どもたちに支援を提供すべきである。スムーズな学校の管理・運営（マネジメント）には、教職員が積極的に創造的な仕事に参加しているか、効果的な協働が展開されているか、生徒たちのニーズに合致する支援を創り出そうとする教職員のチームワークが成立しているかが重要である。

2 マネジメントの視点と創発的戦略 ～H. ミンツバーグの組織論を参考にして～

マネジメントの観点は、「意図されたプランとしての戦略」と「実現されたパターンとしての戦略」の2つがある。意図された戦略のうち、実現されない戦略を外し、創発的戦略を入れたものが実現された戦略となる。

インクルーシブな学校づくりには支援型マネジメントが重要になる。支援型マネジメントでは、リーダー型マネージャーは、実際にマネジメントを担うメンバーを支援し、よい実践を言語化して示す。世の中の様々な事柄は、PDCAサイクルで解決できるが、支援については、計画された戦略のうち使えなかった戦略は捨て、創発的な戦略を組み込むことにより、実現された戦略になる。

3 「特別支援教育についての推進（通知）」（2007）

論点1：主体的な取組の支援 論点2：対象の拡大 論点3：困難の実態把握

対象を客観的に把握し本人が主体的に取り組む際の困難に対応していくことが重要。

4 「高等学校における特別支援教育の推進について～高等学校ワーキンググループ報告～」(2009)

論点1：校長をはじめとする管理職や教職員の理解・認識の向上策

論点2：生徒・保護者・理解の向上に係る支援

論点3：生徒指導・教育相談等の既存の校内組織との連携

補論：高等学校という組織としての多様性に対応した最も効果的な指導體制を工夫し、組織体

として総合的な力を発揮していくこと～学習指導要領解説総則編より～

高等学校は、様々な多様性に対応するために学校独自で考えていく。その際、異種同型化(多様なものを同じ型にする傾向)への注意が必要である。

- 5 「高等学校における通級による指導の制度化及び実施方策について (報告)」(2016) (省略)
高等学校に通級制度を導入する際、生徒との関係・インクルーシブな学校組織が重要である。

第2回 ②「虐待の実態について」

講師：杏林大学医学部 教授 佐藤 喜宣 先生

DVと子供虐待。子供虐待だけやればよいのではと皆さん思うかもしれないが、DVと子供虐待は表裏一体の関係にある。今日用意したパワーポイントは入門編である。杏林大学の医学部では対応するシステムがない、スキルを持った人がいないために勉強会を実施し重ねていった結果、委員会になった。全天候型の虐待防止(子ども、DV、高齢者)委員会になって26年が経つ。わかりやすく説明していくことによって皆さんの断片的な知識がつながると思う。

[質疑応答]

- ・性的虐待について →特徴は、男性教諭に対して媚びるが、女性教諭にはツンデレ。耐えている時間は精神衛生上、よくない。解離したものが返ってこなくなるのが16～18歳が境目である。この後が統合失調症の発症に関わってくるので、その前にその環境から抜け出してほしい。
- ・身体的虐待について →着衣におおわれている場所が多い
- ・ネグレクト →歯科領域では2本以上の手つかずのう歯があった場合は、ネグレクトを考える。上口唇小帯(離乳食をあげるときにスプーンで乱暴に与えていると切れてしまう。それを見ると、この子いろいろあったのかなと見当がつくことがある)
- ・DVから逃げてくる母子に対して→女性問題の窓口が繋がってくると、前いた場所の情報が入ってくるので客観的に見ることができるのでそういうルートに繋がればよい。
- ・医療チームをうまく活用するとよい(地域関連、メディカルソーシャルワーカーなど相談窓口の確認)。

第3回 「学級集団づくりにどうかかわるか～Q-Uを活用した取組」

講師：教育・子育て支援研究所 所長 中村真理子 先生
多摩市立落合小学校 主幹教諭 竹川 優子 先生

I なぜ集団づくりか

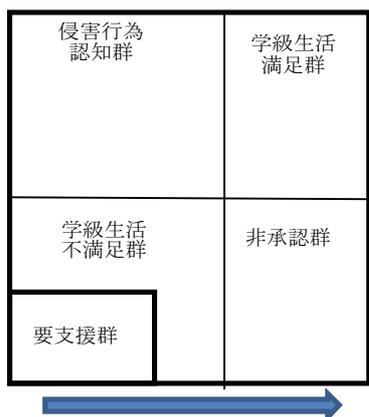
子供は家庭や学級、部活などの『集団』の中で育っていく。現代社会では、コミュニケーション不足で集団生活が上手くできない子もいるが「あの子は家庭の課題があるから」「あの子はそういう子だから」といった批判するだけではもう済まされない。教育職員として、どのように仕掛けて子供達を育てていくのか。子供の特性を知り、集団の中で育てていくことが必要である。Q-U (QUESTIONNAIRE-UTILITIES 以降Q-Uと表記)は、子供の特性や状況を知るためのデータの一つである。

II Q-Uとは

1 Q-Uの概要

- ・「楽しい学校生活を送るためのアンケート」であり、児童生徒の個別指導や学級経営に生かすことを目的に開発されたテストである。
- ・Q-Uはアセスメントツールである。現在、都内15区市町村で取り入れられている。標準化されたテストであり、現在は全国で400万部を超えて活用されているものである。
- ・Q-Uでは、「ルール（集団で安心して生活するための基本的なルール）横軸」と「リレーション（安心して本音を言い合えるような人間関係）縦軸」という2つの尺度を用いたものである。ルールとリレーションバランスがとれていると、集団は安定しているとする。
- ・個々の満足度や学級がどのような集団なのかを見ることができる。

2 プロットの見方



- ・縦軸は学級で認められるような人間関係であるか、横軸は学級の中で嫌なことをされたりしていないか、孤立していないかなどを見るため、対象児のプロットがどの位置にあるかを見取る。
- ・矢印の方向に向かうほど縦軸であれば、対象児にとって学級は自分自身を認めてくれる環境であることを示し、横軸は学級で嫌なことをされたりせず安心して過ごすことができていることを示している。

IV Q-Uの視点をもつと～人材育成としての活用～

1 集団指導場面

- ・ルールの確立と人間関係づくりを行う。（各学級・専科においても統一）
- ・アクティブラーニングの発想で、教育方法の改善につなげる。（教えて、やって見せて、共に行う）
- ・教科において、エクササイズを活用していく。（話の聞き方等）
- ・特別活動（修学旅行や運動会等）でもエクササイズを行うと、班活動がきちんとできるようになる。エクササイズができる場面は多い。

2 個別指導

- ・個別のデータを用いることで、共通認識のもと関わる事ができた。客観的データから、問題に気付くことも多く、そこから教員間で会話も増える。

3 専科の活用

- ・担任とのQ-Uに関する情報共有。
- ・講師や主事、ボランティアの方など、子どもと関わる多くの方々と子どもの実態とQ-Uについて共有をしていくことも大事。意外な発見に行き着くこともある。

4 学級経営案への導入

Q-Uの視点を入れることでよりよい学級づくりにつなげる。子どもがなぜこのような回答をしたかに目を向けて、手立てを検討する。建設的な考え方や行動様式が学級の主流になるような対策を考える。

5 集団を意識した個別支援

よりよい集団にするためにも、個々の状態を確認しながら支援していく。上手な人は、学級という大きいうねりの中で集団を活かし、その中で個別支援を行っている。

V まとめ

- ・教師の価値観にそった学級集団になっているのか、それを見ていくものとしてQ-Uは活用できる。
- ・Q-Uは一人で考えるのではなく、小集団で考えていくのも必要。

《参考文献》

- ・「学級つくりのためのQ-U入門」 河村茂雄著（図書文化）
- ・「Q-Uによる特別支援教育を充実させる学級経営」 河村茂雄編著（図書文化）
- ・「学級崩壊 予防・回復マニュアル」 河村茂雄著（図書文化）
- ・「対人関係力を育てる授業の最前線 実践！ ソーシャルスキル教育（中学校）」
相川 充・佐藤正二 編（図書文化）

第4回 ①「今年度の実践報告」

講 師：東京都立大島海洋国際高等学校 副校長 小口淑江美先生

（1）学校紹介

大島海洋国際高等学校（海洋国際科）は、大島南高等学校（海洋科と普通科）が前身であり、平成18年度に学科を改編し校名が変更になった。新しく受験する生徒は12期生となり、比較的新しい学校である。伊豆大島の南部に位置し、大島南高等学校時代は、“南高”、現在は略して“海国”と呼んでいる。

（2）自己紹介と経歴

（3）養護教諭の仕事

（4）舎監長の仕事

（5）本校の特色

“海を通して世界を知る”ということがコンセプト。国際系なので英語の授業が多い。1年生では同じ授業だが、2年生になると国際系と海洋系に分かれる。海洋系を選択した場合、水産高校と同様のカリキュラムを受けられるので、水産高校卒で大学受験が可能。今年度も、東京海洋大学に受かっている。国際系を選択すると、英会話の授業が多くなり、習熟度別で展開している。

沖ノ鳥島や南鳥島などの観測航海実習、国際航海もある。その中で生徒たちが学ぶことは、インターンシップに近いものである。実習で身に付けたものを基に、進路を選択している。生徒が外国実習に行く時は、クルービザを取ることになるので、事前指導でその重要性を伝えている。本校の教育活動すべてがキャリア教育と思えるくらい、いろいろ取り組んでいる。

（6）寄宿舎生活

海国で学びたい志があるけど自宅から通えない子が寄宿舎に入る。当然宿舎にはルールがあり、清掃や身の回りの整理整頓など、自立した生活が求められる。卒業後、福祉や看護関係に付く生徒もいるが、入所生活の気持ちが分かる生徒に育っている。また、入試などの面接では、語れることが多い生徒、いろんな経験をしている生徒がいると感じる。

第4回 ②「健康教育で学校が変わる！」

講師：東京都立赤羽商業高等学校 主幹教諭 西川路 由紀子先生

(1) 自己紹介

(2) 健康教育で学校が変わる

A高等学校で文部科学大臣賞を受賞した。赴任最初の頃は大変で、何とか健康教育で変えていこうということで動き、10年経った成果物を表彰していただいた。

自校の健康課題を捉えるところから始めることが大事。「いつも耳をダンボにすること！」他校がやっているから自校でもやるのではなく、自校の課題が何かを捉える。立案・提案・計画・実行では、思い付きで進めるのではなく、教育課程や学校保健年間計画に位置付けることが大事である。

(3) 健康教育が必要！と発信する

生徒に生涯健康に過ごして欲しいと願い、先生方に発信してきた。初任時、6月にむし歯予防としていろいろ生徒に伝えたかった。昔だったので指導書もなく自分で本を購入し、イラストを自筆しながら製本して、生徒に配り朝礼で指導したのが始まりだった。

その頃、職員室が喫煙の煙で大変だったので、たばこの害をやりたいと思い、さまざまな方に協力を仰ぎ、まずは保健所に相談し、来校して指導してもらった。

一人ではダメなので、必要だと思ったら色々なところに協力を求めた。歯と口の健康づくりの時は、無謀にも教育委員会に連絡して資料をもらったこともある。

日常的な指導は、伝えられる場を探し、朝礼でインフルエンザの注意喚起をしたり、ケガ来室の時には、治り方やその後の手当などを生徒に話したりした。

(4) 歯と口の健康づくり

A高校での最初の歯科健診では、おにぎりや飴ガムを食べながら健診を受ける生徒がいた。健診結果を見てもむし歯が多いし歯肉炎も多い。校医から、まず歯磨きをしてから健診を受けさせてくださいと言われた。

翌年から歯ブラシ持参の健診となり、折角なので、歯科衛生士より結果説明を受け、染め出しと歯磨き指導を入れた。セルフチェックカードを活用し、事前の間診をすることで、生徒に意識を高める工夫もした。

歯と口の健康優良生徒には、表彰状を作成し、渡すと結構喜んでくれるので、関心を高めるのには有効であった。高校生は口臭に関心があり、朝食未摂取の方が口臭が強いというデータがあるので、口臭検査では朝食指導につなげることができた。味覚検査では、5種類くらいのもので試したが、塩味の分からない生徒がいて、最近のコンビニ弁当（塩分）が影響しているのかと感じた。

生徒保健委員会活動として、文化祭で砂糖の含量比較や弁当コンクールを展示し、後にはそれを北区の食育フェアで発表した

(5) 薬物乱用防止・喫煙防止

(6) エイズ理解と予防

(7) 心の健康

(8) まとめ